会長講演

肥後の医学史

鹿子木　敏　範

第九〇回日本医史学会総会がはじめて熊本で開催されるにあたり、肥後藩時代からの医学史を展望してみたいと思う。

細川八代藩主重賢が盲目の医人村井見朴に命じて医学寮「再春館」を二本木の地に創設したのは、宝暦六年（一七五六）で、これは、多紀安元が明和二年（一七六五）に神田佐久間町に開いた躋寿館より九年早い。安永三年（一七七四）に島津重豪が鹿児島に医学院を設けたのは一八年後、畑黄山が京都に医学院を興したのが天明二年（一七八二）であるから、再春館は、事実上わが国最初の公的医療機関ということになる。それ以来再春館は、肥後藩における皇漢医学の本山として明治三年まで存続した。

再春館の教育方針は当時としては注目に価する。再春館では壁書を掲げて教育方針を明示し、朝夕生徒に拝誦させたが、三か条の第一条には、

一、医の道は岐黄を祖述し、仁術に本づく、故に尊卑を撰ばず、貧富を問はず、謝儀の多少を論ぜず、専ら本分を守るべき事

と書かれている。階級差別の厳しかった当時、士農工商の別なく、医道に志す者はそれぞれの手順を経た上で入学を許可

した。画期的な門戸開放であった。束脩も軽少で紙一束または半束であった。

しかしこのような門戸開放の方針も、開校四年後に見朴が病死し、見朴を助けた嗣子の椿寿もまもなく辞職するに及んであいまいとなり、明和八年（一七七一）に山崎町に改築移転するに及んで、師役の方から士席以上の帯刀を願い出たりして、見朴の初志は無視され、再び階級格式を重視するようになった。

もともと肥後藩の医師制度は独特なもので厳然たる階級制度に支配されていた。士席医師と軽輩医師の別があり、士席医師には御匙（侍医）、御次（近侍医）、外様御医師、御中小姓御医師などの階級があり（御医師は士席を表わす）、軽輩医師も御目見医師、独礼医師、諸役人段医師などに細かく格式待遇が分かれていた。

再春館もこの医療制度の支配を受けていた。学校は学校方御奉行の所管で、その配下の再春館御目付の指揮を受ける御医師触役、医業吟味役、師役等の医師が職員や生徒を管理していた。再春館から長崎へ留学する者は長崎出向の熊本藩留守居役の監督を受け、所用で帰郷の際も留守居役を通じて長崎藩に届けていた。このような厳しい規制のため、西洋医学の公式の導入の道は封じられていた。嘉永二年（一八四九）にも、三年十五日付で老中が蘭方禁止令を出している。その年高橋春圃という地方医師がモーニッケが天草にきたときいてすぐ赴いたが会えず、長崎まで足を伸ばして種痘を学び痘苗を得て帰ったが、出国の禁を犯した罪で蟄居五〇日に処せられ、痘苗は廃棄処分となった。翌年許されて再びモーニッケを訪れ、痘苗を得て帰り、嘉永三年（一八五〇）に肥後藩最初の種痘を行っている。明治初年まで続いたこのような禁制が西洋医術の普及を阻んでいたのである。ちなみに軍医からのちに大阪府病院長となった高橋正純、古城医学校助教から大阪慈恵病院副院長となった正直は春圃の実子である。

肥後藩において西洋医学の導入を強力に推進したのは横井小楠である。甥二人を勝海舟に託して米国に留学させたほどの徹底した開国論者であった小楠は、西洋医家を援助し、親戚にも西洋医療を勧めていたが、彼は政府の参与に召されて間もない明治二年（一八六九）一月兇刃に仆れた。しかし翌三年、かねて小楠が嘱望していた細川護久が家督を継ぐに及

んでその抱負は実現された。この若い藩主は、小楠門下の人材を続々と登用して藩政の改革に着手し、医学の面でも、明治三年七月八日付で一一五年続いた再春館を廃止し、西洋医学への画期的転換を断行した。

まず長崎から、当時名声の高かった吉雄圭斉を招いて病院を開き、翌年吉雄の推薦により、セ・ヘ・マンスフェルトを教師に招いて「医学所及病院」（通称「古城医学校」）を発足させた。マンスフェルトは明治四年四月二十日、通弁を伴って海路百貫港に着き、途中出迎えた生徒百名とともに熊本に入った。当時は攘夷論がまだ鎮静したわけではなく、はじめて接する外人の身辺にいかなる椿事が起こらぬとも限らないので、藩庁は「朝廷に願い出て許されたものであるから通行に支障のないように」という布達を出した。ちなみに攘夷主義者が神風連の乱を起こしたのは五年半後である。

マンスフルェトは古城医学校におけるただ一人の教師であり、基礎も臨床も一人で教え、一人で診療を担当した。彼が三年の任期中に教えた生徒の中には、緒方正規、浜田玄達、北里柴三郎など、のちの日本医学界の指導者の名がある。しかしマンスフェルトが去ったあと、学校は自然消滅の途を辿った。

明治九年に当時の県令安岡良亮は県費による医学校設立を計画、家老の邸宅を校舎にあて、三浦省軒（明治九年東大卒）を招いて十月開校式典を挙げたが、十年二月西南の役の戦火で焼失した。その後疫病が流行し、器具も乏しいという状況を伝聞した真宗大谷大教正の寄付により病院建築を始め、十一年五月開院式を行った。まもなく三浦が辞職したので赤鹿東作を招いて院長とした。県はさらに医学校再建を企て、九月一日新築の校舎に開校式を挙げた。これが熊本県立医学校の再発足である。十三年八月浜田玄達（明治十三年卒）が教頭（のちに校長）に就任、翌年弘田長（明治十三年卒）が外科を担当、十五年に熊谷省三（明治十二年卒）を招き、教師中少なくとも三名医学士という条件を揃えて甲種医学校の許可を得た。この頃がこの学校の全盛期であった。やがて十七年十月には浜田、弘田が辞職して大学へ復帰、二十年の勅令四八〇号で府県立医学校の費用の地方税支弁を禁じたため、二十一年廃校となった。これから熊本の公的医学教育はしばらく空白期を迎える。

二十八年に県立病院が再開され、知事の依頼を受けた浜田玄達の斡旋でまず松浦有志太郎（明治二十五年卒）が外科部長に決定、ついで同期の豊田虎之進（眼科）、秋元竜次郎（婦人科）、さらに三人の懇望により当時松山病院長の谷口長雄（明治二十二年卒）が院長兼内科部長を受諾した。病院の職員の陣容も揃ったところで七月二日開院式を挙げた。

このメンバーを中心として翌二十九年創設されたのが私立熊本医学校である。幸いに県と県民の圧倒的支持を受けて学校は急速に発展した。ところが、三十六年三月に発布された「専門学校令」は、全国の私立医学校同様、学校を存亡の危機に追込んだ。幸いに多年文部省にあって教育行政に精通する江木千之知事の着任、協力もあって、三十七年二月、私立医学校中もっとも早く専門学校昇格の認可を受けた。ちなみに私立済生学舎はこの時廃校となった。大正十年県立に移管、十一年五月県立医科大学に昇格、十二年二月、学長人事をめぐる紛擾の末、長沢伝六学長就任、十四年十月、学内不一致のため長沢学長辞任、代って山崎正董学長就任、その後昭和四年五月、国に移管されて官立熊本医科大学と改称、戦後、二十四年五月国立大学設置法により熊本大学医学部となり、現在に至っている。ちなみに、同医学部では、明治二十九年九月の私立熊本医学校創設の年を医学部発足の年と定めている。

（熊本大学名誉教授・尚絅大学）